やまゐ集

四三六

和装本
へ5
6484

宮城縣立圖書館
宮城縣
圖書館
宮城縣
雲井文庫

義方法華経序

安海人五宿てふ物語侍りけ
るを義ふ人ものしたりけ
れども筆跡のやうやうにて
市をなすまきのそこなの中へ
出ぬ所なく見侍りけ人の
皆ゝ花たち尺にあらはまことやよう

宮城縣立圖書館
<5
6484
0101860220 98

あるべきうの新あるのれてたくさん
やうなし家まち彼あきとん
も学ちよ指代れもこの者
をなくあ人見代を組あま
言ちの人のほを抜とう屋と
年加へあくあまけよ
お屋人乃家をこなしし

中ちの数人移り人のまう
きしあへいくれれ代第の
抜者達三人かもらまき発
笑ちあよ入れおあ知なあ
き代第のあをひきん
よ理数出作と物年もとの
しから出ちれ英ちをち知

さくなりと大義をして持、
かゝるわゝ程長を后の淳り
物事とはなるべき先をやし
しらるる日　月底

あらうふと思ふ情よ春の月　月底
種つ芋水の濁濁る音　鴻水
穀入のわろつく面を乗りて　底
衣合の菓へ退る焼肉売　水
なるほる名所〳〵の絵図をふ　底
ちつなな市を孫〳〵山うけ　水

子供等も為もよき児子お宮　底
四五日休む　湯屋の湯出し　水
毎日中さられ道さ行く病床　底
夜さ入りうう　盃酒よ酔　水
長所へ始終ハ言入る等一方　底
温泉僧して拡明　嗚立　水
月うけよ橋屋　屋敷紀水魚　底
うんなう　婦人　本屋の嗅　水

触出を男小屋　底
今年さ来を　底云　水
人妻さよ花ゆ　底
雀ハちうと　巣写　水
二足まて草鞋　踏接く日の水　〃
祢宜　婦　底
元猪も安き　鐘のとれ　水
囲物書さ　底

付まとふ物もうゑ添さゝ紀庵上り　水
雲場よりうゑ添　梅のおき　底
牡蠣丈三十日掃除もさうと流　水
波年の水鉢よりうゝ哭振　底
水戸出れい馬虻ひ出の傷蜜　水
お朔時鐘を雪流ゝ清　底
拠何年多掛ゝふ月秋　水
牛の後立つ　秋鈴動　底

百の鉢ゝけて秋の坊もなゝ　水
芝て蓋ゝて添母の留主頃　底
日癖ゝて一日ゝれハ一日傳ゝ　水
あまさ花尺後き花ゝ乳ゝ　底
とゝもうを蓮の白ゝ候の音　水
茶ゝけゝ仕ゝ鉢の落和ゝ　雫

ものいはぬ人にあはぬ秋の暮　月底

花よりも人ハ萩を折る時　文之

葛藤よ社殿の酒の寒窮て　底

俳をやる多のひとりつゝ吟　之

船をまて舟をうり来る風二合　底

下駄をつゝ庭の働き　之

手をうち手へ鈴吹銀よ寒ゝをり　底

分られきれハ人よ傾ゝ　之

一ツ切ゝ故を惜りて切ゝ分け　底

きゝ麦ハ穂ハさをぬ茶ハ亜　之

明孫よ新無子講の新を狀　底

徐行よ中一英洪の大水　之

松の朱よ寂僧寺の月澄て　底

綾さゝ書の冷る矢来戸　之

縄解て梨子盗人を追ひ逐し　底

上戸ハ人ハ知ぬ　喰越向なり　之

日当へ蕣の花ばかり咲れ　底

塗立蔵の光る風も　之

なほ苦ひ籠智せもき蕾も　〃

すまぬ形へ誘ふ岩達　底

一しきり霰降れて雪ふれ　之

根ふりを洗ふ晩のうらく　底

立ぬなら沢一ふて出くるなり　之

行てゆるまる物のむらゐ　底

交代の度ふ寄ふ久留米点　之

どこも鶯のよしれる冷ぬ　底

名月の宵ふ合ふ橋ふ集メ鈴　之

旬吹ふ結ふ光の結ふ　底

ちぢれつゝぬ菜葉して灰ふ歪　之

又お尚の心ひ　ちてなく　底

郭公なきつるまゝの小おりて　之

人目も疎く咲物花の咲　底

春ゝまけて後は比丘尼法師　之

住吉なれぬる志ら鏡　底

のりとゝ日新一日花形上　之

おりゝ雀ゝ鳴くる鶯　底

灯ゝ光ハ今宵ゝ春ゝ雲ゝ月　底

ゝ雲ゝ雲の降りさる後　花撞

ゝ雲ゝ雲の降りさる後　底

ゝ雲ゝ雲の降りさる後　撞

ゝ雲ゝ雲の降りさる後　底

ゝ雲ゝ雲の降りさる後　撞

しく秋ハ弱地の稗も俄に増し

京を見て久しき　搖

紅もみぢ紅葉の時雨や姫猫の尾　底

蟬くゝ坂のもつと涼　搖

うしろ姿後偏しる雪の中　底

きひし紀あるこゝに出る石　搖

生まれをぬけぬ斗の古法師　底

時候初ひよ布を引張る　搖

蛍てんてんあるあらぬ月と花　底

ちこて時雨もとゞ笑く雑子　搖

毒茶ハ赤社の鈴色いそうき　底

不の名ゝ山人形名　搖

言笑ひ傷よ春るるの信甲　丶

切渡さんあを涼大立皆　底

日蔭の凍さ人解ぬ寒さて　搖

出より長燈よ乗しる夢　底

つ附の小唄あちらこちら渡る

西吹交せく粉つける降　底

艇舟のうへ上へと積重る　掩

鳥も出されぬ煙りやのかり　底

聞まてつゝく九月の月冷へ　掩

古艇の候をとうとうく　底

庶笠の新りうへ涙雪宵　掩

片見へ入日ゆ集色ゆるき　底

生涯を杖一本の宿掠き　掩

奉仕宮町所家　底

ゝとお寺の橋の手列深　掩

晩もしる花まる春　底

日のうちゆ時もうるゝ花曇　掩

吸売多る　春夏秋冬　等

四季礼題

稲つみや一足先よ海り水　梅室
家も茅も皆とけ入て雪車の人　九起
雪うち雨の上る匂ひや山ざくし　道拙
遠く梅よ夕日霞みてむかの夢　有義

おのさま酒も泡らせて萩の花　儀年
まさ杖もあるて名残の春の月　杜磐
垣ちしよ濃へ赤と一茶の香　芍舎

稲妻やくとりしる茅の泥　芳英
今ぞ出て遠退く舟や丁の夢　洛鈴
さて夜とは寒して弦合ふ砧　梅通

雨うれを偽る寒まして秋の雨　卓丈
思ひをたて嵐のつくや壁の蔦　岳風
ふれと出く月乃へ行やさの犬　丈翠

まうめの花よけしき花火哉　杜蕉
焚すてし火の残る枯野外　晋尼

焼籾のうしろやゝ一家内　黙他
ちり初る花うらゝかに天気哉　勝鈴

枯る木も花に大系や冬の月　烏谷
寒雨や行貴うみを雲ひ為　祭魚

鶺鴒や清川つゝふ[illegible]れ　未明
を称上る海老の髭ひや時雨雲　雨翠
退来るも遠を恭や月の京　風光
古簪やわれらう為の[illegible]程　君白

経ゝき芽田の雁や九月尽　一具
沙水の押ゝや秋立秋の穀　是升
新公時行いつやさし向　山分

あら寄なきさの音捲へて舟の月　伯遠
おり[illegible]き身秋色[illegible]り時ちう　五株
留る水流てアラや初月夜　卯息

さ沙よ水書と[illegible]る時[illegible]れ　卓郎
中意や夢て留もなくなるの月　得善

雪の降るや雪よりも先き人の笠　惟学

待て乗る小舟にうつる梅の花　氷谷

初空をうけぬ地もなく金屏　逸渕

あるほどの花よ立ちかり霞　風外

時雨るぬ山の時雨る音解れ　確崖

梅うるや切合川の水ぬる　氷壺

月清く霧る月夜の西也坂やの中　抱儀

蝋燭の光を掃出せば小家哉　呂川

柚山やてるむ一筋て月のかる　氷由

徒然す家人を床の男や杉の間　由碧

ゆるる床の音をあひて種下し　祝心

初雪や神の竹ひろう杉の奥　助宜

人さりて深き雪の戸口哉　金合

雪ふりし人よ切髪子の日哉　萬古

うく雪人家て雪切枯柴哉　為山

冬至とも志らで芦葉くゝる弧舟�(«)　遊流

をゝ雪のふる門よ寒る風情哉　魯心

拍子なるのおもゝりおぼろ月　如子

朝夕に同じ様の妻ひとり　丁知

萩花眼よ淋しう枯れ　杜宥

日も弱ゆよ山茶花や垣ぬし　萬頃

遠のれとやふ家鴨や妻の月　松什

めつゝしう誰も赤ゐの入　流芝

温泉ゆうて居むる義禁哉　梅笠

ほちくゝと雨ふる雨ちくんされ　吳城

花を見よ世ゝ日ゝ見ぬさうれ　仁夏

山の水梅のうへ下雨ふり　荷弓

月の世や赤ゐ星ゆう家し　垂天

乙うけさとも考て子ゐ略　風朗

子ゐ家て見ぬ家ゆ福寿草　春長

接て来く車井取く頃ゆう女　聖泉

耳洗ふと冷うとぼうきに　楓葉
蟬はけふ日を尺ぬけて鳴ひとり　宇弘

木の実うち落して秋のうき風　御風
そこらまで来くれよかし時雨哉　潘々
門ふてる屋も涼めつ夏の月　たよめ
一筋は彩雲の百や水鳴り　鬼川
青物を乗せて出る町の四月雨　一止
[illegible]
牧草を喰ふや柳原の朝ぼら　卓池

郊の花や鳴ちひよ旅鳥うり　小竹
星合や如ハ青ふ天人とも　稲岳

秋の蔵深笑ふまでよ老よりう　塞石
棟つひしてもむきぬ家の月　石菜
鳴けて郭鶏の小ちる氷れ　蓬宇

ひりもいハ生何ふ家や五月雨　茶岡
切り青ひ鳴や地雨のかちきに　完江
茶つき行庭掃て切り寄うの雨　三岳

乳のつゆぬ月の出てあり蓋て出花　　圭布

清くて時　樽　出て霧や横波し　　波文

幹と枝をいと雲ようめの花　　青の

梢うつこゆに光りや　秋出て月　　清山

星見へて日々松ありて桂屋　　負山

霧入や赤とくく角の二日降　　青芙

雪打の中よ徐うり小家角　　の松

とんぼうの留て地の面　　月坡

向やうて背骨の寒二日灸　　枫下

名もうりハかくくるみの茅葺角　　花屑

柳丈落てあるうハ月出て角　　雪秋

うりつくき雲のこゆるく鳴みる　　晁峰

ふとんまてうけて火のなき巨燵　　閑那

二ツ居く夢を清ゆる　桂ヶ南　　洛叟

東ハ桂よ西ハ光や　鳴の雪　　素屋

石橋や大川筋もか義の水　　鼎尤

澄とあて夜を鄙ちや秋の月　白雪

摘くて美菜洗しや素烟　松濤

みの雫行蓑ゟ紀ゟり小妻宮　林曹

折水仙花なき萩を夕添め　協兄

遠くうつる塔白き書田ゟ孔　其山

とん浮ゟとあぬや水ゟ出る杭　冬岐

をとりゟの落てゟゟり迎び舟　杜鵑

ちる時を待玉花やけしの花　祇白

むしを為て菓ゟよ美くる桔梗ゟ　班竹

郭ゟ生豆の実を夢ゟ帽　曲隼

枯芦やひとり打ち寂る豆の書　芋丈

孫る坊の井を時て出る月秋ゟ　帝扇

北ゟしく坊や聖松の秋ゟ雨　墨雨

一孝ハ水鶏も時て初あらし　蔣池

八重葛眼ハおよぬゟ初ぬゟ　子大

秋もすゑ雪ふ骨折る爲うの南　今是

ちつとまる碑の白ひや京の月　金陵

胡瓜や秋折ふうのひと墨　茂雄

秋の蚊や人ふもつうる水の上　孝九

名の無ぬ草むらもなし春の風　蓬山

手洗ひよ海まで出さう春の月　無々

筆折はむく書やう清軍寺　斗丈

元旦橋も伸へくあるや川社　甫田

蟹一ちんあて法なし雑炊の夢　袋雲

初秋やうつとくとひ一作筆　桐一

鄭ゝ秋深き水の上八そよう紀　湛石

花のうち松へ寝ふ折る爲うれ　東宇

枯果一芭の泥塊るうすうれ　萩叟

老ふうれの田を畑ふ也鄭公　石鼎

大川へ旨折水やうう折秋　夜白

藤花屋てなし宿ううぬ杜若　一禹

書初や人ふ考うさぬ鄭の間　梅勝

小風の一先風てうめのそれ　却き我　流芳

見れはとよ祝むき秋はを猫の恋

風雅

山人も尚よハなしなしは　初　揺　石介

芦よ丁彩ふ雪の古ほれ　波同

そそふふ吹やうはなり秋の風　條力

歯ふ人ぬうちよ減しぬ　炭俵　且為

すしさよつはそもよ扇乳　舎用

見る夜よ也さ半なり毒の月　天拙

始時て　松移なり　杖ふり　梅宿

塩塩の也ふまて　格ふふん　秋代　毒和

穀山よ添ふ一棟也　后の月　馬嘗

穀入やいふふり月ても　俳ふふり　西后

秋すし松の家穀る　孫の上　蔓青

袁時よ年年の毒ふ　笑へふ　十朱

淋淋さ人ふふまく庫の苦下代　馬沛

ふり留ぬ人の毒岳や　孫の子名　茂東

積上て風流れより上り堰　蓬仍
川堀の岸をたゝき小春水　路水

田面うつ鳥や月の霜　英山
二月や雨よりむすぶ草の芽　杜佶
あたゝかゝもかゝぬちの梅雨　鳶月

日ゝまれと延く畦の泥うれ　桃雪
一さんよ海邦早て冬の月　之江
松の根へ小屯して垂る菌多　鵬岳

茶むすよの角と雪や秋日和　蓬夏
泊て行日のちらゝと秋の水　東鳶
初月や日和さまる汐うつる　虹橋

なまりの咲ゝやうなり桐の花　洛竹
五月雨よ交ぬ流の吉ゝきゝれ　桃里
木枯や形を離れぬ六日月　駝松

水よ澄む花のうけや星の月　季曠
雪なゝゝ春の笑や山形　思文

初しぐるるや門の雪　宜長

門口ゝ細ぬ物ぬぬや菜の花　南項

宋月や移れば風の机さり　仙陵

秋の冷の増野もある天竜哉　戟為

山〳〵のうすり日更て宋子雪　季琉

芋やまさ連の赤ぬ仕立舟　茶瓢

出羽よりてふ山の花　微笑女

郭公二階ゝ深る朝ゝより　秋湖

きすゝやまさ日ほりの芋ぬ青　可也

田一牧植のこされて星のうけ　蒲堂

掃除して数るみ見るや柏の花　蓼壺

うゝほと人の数なれ田植哉　可象

花の雲集て宇佐の楷の南　意知

楊越さゝ村の名残る幟哉　葉明

手ゝれハ光ゝの白ゝ蛍哉　九嶺

西風まむ人ハ来き植麦哉　司丈

背負ゝ荷の籾入めゝや宮更　有楊

きく菊や日暮れて時雨し　桃秀

秋立や九月の空の水くらし　蕉月

涼物や雨ぐきはめて旅二日　嘉陵

出雲路のくらやみの梅の花　芝石

かへる縁は此の道のなれ柳哉　西涯

家々や日南仙りや梅ぶし花　砂泉

名月や名をうけて立岩の角　而峩

清水や蛙とく鳴り寒の水　鱸亭

赤川清く打あひ清や秋の雨　蕉江

扨きて落さうよりおもき雲雀哉　一清

さて出て戸を分て明ぼの　晴帆

きりぎりすや一抄水の春四　奥山

芋ばたや萩より寒の赤色　松良

野越や篇生な家やくさの秋　淩雲

夕やけのきりぎりすや赤とんぼ　庶知

暖かなる一日二日や垣の萩　梅裡

山宵や萩をしつける吹く風　金蕉

月代や遠山うみを松の上　適角
ほうらかな山水ぶくく秋の月　雨篁

聖ゴ世れば秋の空ぞ高し　我竟
海山を秋くゝよ海して穀の月　芒里
山ハ皆西日表や　秋の風　蓼山
舟うゝも乞ふ沾の こゝまれ　百川
降ゝぬやうゝ解ゝや春の雪　容居
その家も二階の廣き汐干　魯山
見ぬき寺大の高や　苦の花　素南

月よりも影を根ぶや反ぶ立　凡也
雨雲のあやみくく蒼てきりくす　花央
塔の羽よ紫ぜて雲ぶや上天寒　雨耕

菊ゝ花ようゝれて菊る樓角　雪母
明ぶ月やちとりの鳴なれ　梅僑
時き月や気味ゝ紀月の少ゝ石　憐文

お酒くゝ来くゝ士奉ゝゝり菓摘ゝ　寿乐
初三日ちゝる鶴も月て亀茅ゝれ　亀声

芝生り人うみとく植田哉　李衆
手枕の袖ふく更る踊哉　丑聲
屋舎を明て日の毛や蕨賣　宋岱

岩間をり遠ひびき郭公　柳居
時雨しも替りくやきりくす　玄堂
枯て毛くきるる弛毛や冷瓜　雪嶺
二階灯の毎しくたくて渓の月　百勒
枯て板橋明りの増屋哉　蓼嶺
通り人のたてよる涼芝汁　一武

枯て見てく茅毛毛や山の雑　月底

りのみを交て杖漏む流れ哉　清水
雷ふもちうをを持て雨　、
おり上日の見て蔵毛はさく汁　文之
いを立の舟うらくや雪の凌　、
蕎松の見遠て雪ーはの糸所　花掩
舟よ何上物のうの毛ーおろ月

富田藏書

弘化二乙巳冬日

一住舍蔵板